

ロンドンと京都から学んだこと ～お金では買えない幸せ？～

部屋の明るさと経済の成熟度は反比例するという話を聞いたことがあります。貧しさから抜け出してガンガン稼がねばモードの国の国民は、こうこうとした照明の部屋を好み、ある頂点を究めてゆとりモードの国の国民は、ほのかな安らぎの照明の部屋を好むというのです。なるほど、裏付けのデータがあるわけではありませんが、何となくそうかな、と思わないではありません。

どうでしょう？日本でも、高度成長期に、あえて間接照明のほの暗いインテリアが好まれたかという疑問ですが、今は、ずっと落ち着いた感じの照明が人気です。

私は、バブル真っ盛りの頃に大学生で、ロンドンに初めてのホームステイをしました。ロンドン！…ロンドンと言えば、パリ・ニューヨークに並ぶ世界の大都市！東京が遙か足元にも及ばない(大袈裟ですね)すごい所だと想像して行ってみたら、印象は全く違いました。それこそ、照明が東京よりピカピカしているわけでもなく、建物が東京より最先端な感じでもない…寧ろ、歴史と伝統が息づいているその風景は、東京よりも時計の針を昔に戻したような印象を受けたのでした。

それから、ライフスタイル。これにも、驚きがたくさんありました。例えば、休日の過ごし方ですが、日本より一足も二足も先に豊かになったイギリスのことですから、お休みとなればどんなにゴージャスに過ごすのかしらと思っていたのですが、実は彼らは、近くの公園でのんびり寝そべりながら本を読んだり、日光浴をしたりして過ごすことをとても楽しんでいたのでした。

或いは、自分の家を自分の手で丹念にリフォームすることで休日を楽しむ…当時の日本人は、バブルで頂点を究めている頃でしたから、お金があるなら自分ではなく業者に頼むし、リフォームじゃなくて新築をする、そういうことに価値観がありました。

洋裁が得意でインテリアセンス抜群のステイ先のホストマザーも、とにかく生活にはお金をかけずに、自分で手間暇をかけることで、逆に生活自体をより楽しむ、そういう場面をたくさん見せてくれたのでした。

そして私は、その後、大学の聴講生をしながら京都に一年住むことになるのですが、京都に住んでみて、ようやく私には、このことの意味がわかりました。

京都とイギリスは、同じです。

時の経済的なパワーで言えば、イギリスは日本に勝っていません。また、京都も東京に勝っていないでしょう。

でも、イギリスも京都も、ともに、十分な繁栄をし、街に富を蓄積し、そうして頂点を越えたところだということでした。

京都にいと、何もやつきになって国内旅行やら海外旅行やらに出かけなくても、その街にいとだけで、楽しむことがたくさんあります。市内の神社仏閣を散歩するだけでも十分有意義だし、伝統のお祭りもたくさんで行くところに困りません。

しかし、京都でこれらの体験ができるのは、京都という街が、千年以上も都であり続けた経済力の中で、これらの文化的な財産もまた、蓄積してきたからに他なりません。そして、そうした蓄積の中で、真の豊かさを知っている人々は、愛している街での暮らしを楽しむ色々な術を知っているのです。

さて、日本では、バブルがはじけました。

私も、こんなに長い不況は政府の失敗としか言えないと思います。ただ、どうでしょうか。冷静に周りを見渡した時、日本人にどのくらい、お金で買える幸せが残っているでしょうか。もっともとお金があれば、その分だけ日本人は確実に幸せになれると信じるのは難しい状況です。そして、実は、戦後、いや遡れば明治維新の頃から、諸先輩方が苦勞してがんばって働いて貯めた富が、この国には随分蓄えられているのではないのでしょうか。

…高速道路、新幹線、空港、鉄道網。さいたま市に限って見ても、先輩方の納めて下さった税金のお陰で、私たちには、しっかりとしたライフラインの整備はもとより、市庁舎・市民会館・美術館・各種運動場などなど、様々なものを既に持っています。

決して、これらの公共施設がどの分野でも十分だと言うつもりはありません。保育所も高齢者の為の施設も足りません。もっと充実させるべきものも、あると思っています。

しかし、何より大切な視点は、今自分たちの持っている財産・諸先輩が残して下さった資産を、大切に使うということです。合併でさいたま市は、3市分の財産を持つことになりました。私たちがその活かし方を工夫できれば、もっと身近な生活は豊かになるはずですよ。

他にも、ロンドンと京都には、重要な共通点がありました。それは、その街を愛するということです。

その街を愛している人たちは、その街がどういう街であるかをよく知っています。何と何が素晴らしいのかを、よく知っていて、それを大切にしています。そして、その街を誇りに思っています。

まだ、私たちは、合併した「さいたま市」をよく知っているとは言えないかもしれません。だから、どのように愛したらいいのかも、わからなくなっているかもしれません。

でも、そこから、次の一歩が始まると思います。

「さいたま市」は、ピカピカの照明の時代を過ぎて、成熟した豊かさを求める時代に入っているのではないのでしょうか。